書評　『月の科学と人間の歴史　ラスコー洞窟、知的生命体の発見騒動から火星行きの基地化まで』

デイビッド・ホワイトハウス 著、西田美緒子 訳

森谷友由希（東京大学）

デイビッド・ホワイトハウス 著
西田美緒子 訳
築地書館／404 ページ
本体 3,4000 円＋税／2020 年 2 月発行

月は一番身近な天体の一つで、色々な観点から月に魅力を感じている人は少なくないと思う。この本は月に魅せられている著者がとりわけ月に情熱を注いだ人々を紹介している。

著者は古代から現代までの月の科学を二つのムーンレースを中心に振り返っている。16 世紀から 20 世紀に起きた望遠鏡を使って月の地形を観測するムーンレースと、20 世紀後半に起きた探査機や人が月に行って直接情報を収集するムーンレースである。最初のムーンレースは望遠鏡や写真乾板にまつわる技術の発展とともに欧州を中心に繰り広げられる。次のムーンレースでは米ソがロケット開発にしのぎを削る。どちらの時代も月の観察や技術向上に力を注いだ人々の熱さが伝わってくる。最後の方には 1998 年のルナ・プロスペクターが示した水の存在の可能性をきっかけに、現在では月面基地の可能性も含めた新しいムーンレースが始まっていることを示唆している。分量は決して少なくないが、それぞれの時代背景や登場人物にまつわる逸話、各地各時代の月にまつわる神話について折にふれて紹介されているので読んでいきやすい。また、「月がもつ裏の顔」という章では満月に犯罪が多い、出産が多い、といった（事実関係の有無によらず）月が原因とされている現象について調べた研究も紹介されている。

本は、1 万 5000 年前にフランスのラスコー洞窟の壁にかかれた月の満ち欠けとされる絵から始まり、はるか昔から月が人々の生活に深くかかわってきたことを紹介している。さらに第 2 章では、新月から始まって月齢を重なるごとに見えてくる地形を、まるで太陽をスポットライトに役者を紹介するように順に紹介している。本に載っている月の地形図には著者が紹介する地形の全ては載っていないので、私は役者の顔を全て見ようと月面地図を探してしまった。

二つのムーンレースを通じて月の地形図はより詳しく、正確になってきた。では最初の地形図はいつかかれたのだろうか？　著者はアイルランドのノウス遺跡にある、ムーンレースよりもはるか昔、5000 年前に書かれた地形図に回帰して本を締めくくっている。

森谷 友由希
yuki.moritani@ipmu.jp